

国立大学図書館協議会賞を受賞

廣庭基介氏の「京大『大惣本』購入事情の考察」

「大学図書館研究」24号（1984年5月）に掲載された広庭基介氏（附属図書館閲覧掛長）の論文に第20回（昭和60年度）国立大学図書館協議会賞が与えられた。

「大惣本」とは江戸中期から明治中期にかけて、名古屋で営業をつづけた貸本屋大野屋惣八店（略して大惣）の旧蔵本をいう。一般の貸本屋が絵草子や読本など比較的軽くやわらかい内容の冊子類をおもに扱ったのにたいして、大惣のそれは仏書、神道書から儒学、心学、医学、本草、天文、暦学、歴史、地誌、茶道、文学にいたる広範な主題を含んでいたのが大きな特徴であるとされている。もちろん、その中心は浮世草子であるとか、歌舞伎、浄瑠璃の脚本であるとか、読本、俳諧書であるとか、江戸時代の庶民文学であったろうことは貸本屋という業種から容易に推察できるのであるが。

その大惣本の大きな集団（3,673部、13,094冊）が京都大学附属図書館に納本されたのは、館が創設された年、明治32年（正式の登録・受入れはおくれて3年後の明治35年）のことである。京都大学には一般の蔵書と区別される、ある特定の主題のもとに集められたコレクションは数多くあるが、この大惣本こそ、特殊コレクション第一号といえよう。

筆者は明治32年当時のわが国において、こうした大惣本の購入はどのような意味をもっていたのか、また、コレクションとしてどのように評価す

べきであるか、という観点から出発する。そして売却にいたる経過（明治30年～32年）についてだけでもさまざまな異説がなされてきた事実を各種の文献によって例示していく。この間、坪内逍遙、水谷不倒、井上哲次郎、上田万年、吉川弘文館（吉川半七、林縫之助）、大野屋（武田伝右衛門）などが介在し、幾筋もの買却交渉のルートがあって、複雑な様相を呈する。結局、大惣本の中心的部分は東京（帝国）大学、京都（帝国）大学、東京高等師範学校および上野の帝国図書館の四図書館に分割して納本されたことが跡づけられていく。

筆者は次に京大の附属図書館に保存されている図書原簿により納本の業者、その日時、価格などを確定し、さらに例えば柴田光彦氏「大惣蔵書目録と研究」などの援用によって、上野の帝国図書館、東京高等師範学校などに納本された大惣本の内容を照合していく。こうして筆者の論文の眼目の一つである、「選定にたずさわった井上、上田両博士は先ず東京大学のため良書を抜き出した」とか、「したがって他の三図書館に納本されたものはあまり価値のない雑多なものが多かった」となどという俗論が全く根拠のないものであったとして退け、両博士の選別は極めて公平であり、高度の専門的配慮をもっておこなわれたはずであるとの結論をひき出している。文献の博搜と現場での実証が美事に合致した成果であるといえる。

東京大学文献
情報センター タスク・フォース業務報告

附属図書館 木 村 祥 子

東京大学文献情報センターへタスク・フォースとして出向中の木村祥子さん（附属図書館参考調査掛）から、その日常業務を伝えるリポートが寄せられ

てきているので、その主要な部分を紹介させていただく。なお、タスク・フォースとしての今年度の主要課題は「学術雑誌総合目録」（学総目）欧文編の

全国調査準備作業である。ここでは木村さんのレポート（4—6月）の中から主要な部分を抄録させていただいた。

〔学総目・欧文編の準備作業について〕

① 欧文編を編集する中での問題。

予備版の作成、収録誌の範囲、書誌データ・所蔵データ収集の方法とその確認（オーセンティケーション）、ニュー・ジャーナル書誌情報の取入れ方、適用すべき目録規則と配列などが当面の検討課題である。KJ法*により問題点を一項目ごとにカード化した後、共通の問題をさらにグループ化することで、問題の所在と全体的な業務の概要を把握することを目指して作業を進めている。このような作業を通じて、(1)学総目のデータ項目および書誌記述が適正であるか、(2)目録規則としてAACR2を用いて現在の書誌データを修正した場合、どの程度まで修正を必要とするか、が主要な問題点として浮び上ってきた。

② サンプル抽出によるデータの検証。

42件のサンプルを抽出し、その所蔵機関（東大・農、東大・医、東工大、一橋大）におもむいて実地調査をおこなった。これはAACR2を使用して現在の書誌データを修正した場合、その修正はどの程度まで及ぶかを調べることを主目的とするものである。この調査からえられた結論はこの作業レポートとは別に、「現学総目書誌データ修正——調査のまとめ」において述べておいた。

③ サンプル抽出データをAACR2で目録をとった場合の結果はどうであったか。

(イ) 学総目の現データには、冒頭の冠詞が本タイトルの記述から省かれたものが若干ある、(ロ) タイトル関連情報が記述されていない、(ハ) 責任表示のとり方が非常に難しい、(ニ) 巻次、年月次がまぎらわしく、月次まで記述されていない、(ホ) 出版者、出版年がない、(ヘ) 特殊資料表示（microfilm, microfiche）はデータとして入っているが、資料の数量表示はない、(ト) 注記のなかみを限定しなければ、この部分のデータがかなり増える、などの点が観測された。

④ 学総目・欧文編で採用すべき項目と規則の検討。

これまでは学総目データとAACR2の比較をおこなってきたが、さらに広範囲にLCRI, NDL, ISDS, NC案の各項目ごとの書誌記述の相違点を明らかにしようとして、(イ)「雑誌目録規則（書誌記述総則）比較表（未完）」、(ロ)「書誌単位（記入単位）比較表」、(ハ)「データ項目の収録範囲比較表」を作成した。これは同時にAACR2のどの項目を採用するかという目安にもなる。次に「データ項目の収録範囲比較表」をもとに、現学総目のデータ項目が少ないことを認識し、「必須書誌データ項目案（ミニマム・レベル）」を作成する。

* KJ法 川喜田二郎氏の提唱するグループ討議法。検討する問題をさまざまな角度から自由に、かつ具体的に討議し、その要旨を簡単にカード化する。こうして作成された数十枚のカードを内容によって、数グループに集約し、さらにグループ間の関連づけをおこなうなどのプロセスを繰り返しながら、問題の所在を明確にしていく方法。

〔学総目・欧文編の5、6月の進捗状況〕

タスク・フォースは三つのグループに分かれて作業をおこなっている。

① 第1グループ。データベースの事前調整。

イ) LC MARC(S)のニュー・タイトルの取り込みとファイルの作成。現在利用されている学総目欧文編は1980年の調査にもとづくものであるから、それ以後の新規タイトルをどのようにして把握するかが問題になる。そこでLC MARC(S)よりの取り込みが試みられた。事前調査として、K社の販売目録とLCのヒット率、NCとLCの重複率を出してみる。この結果ニュー・タイトルのかかなりの部分がLC MARC(S)でカバーできることがわかった。

ロ) キリル文字の原綴化。学総目データベースは自然、人文社会、補遺版ともにローマ字に翻字された形で入っているが、これは原綴で表示されることが望ましい。人文社会、補遺編では最終部に〈別編〉としてまとめられ、(≡0126≡)のような番号が与えられているので、これによって抽出する。自然科学編はこの番号がないので発行地から検索抽出する方法が考えられた。作業を速

やかにおこなうため翻字から原綴に変える略語登録の方法を採用することにした。また原綴化は変換ソフトによっておこなわれる。

② 第2グループ。データシートの設計、印刷。

第2グループの作業細目の主なものは次の通りである。

- イ) 館別所蔵リスト設計
- ロ) 館別所蔵データシート設計
- ハ) 書誌データシート設計
- ニ) データ調査マニュアル原案作成

これらの作業を統一的にこなうため「欧文編3編記入要項比較表」,「記入要項と AACR2 との比較表」を作成し利用している。また欧文編出

力仕様検討会議に参加する中で、データシート設計もほぼ完了に近づきつつあり、今後は参加組織略称, OCR の関連, プリンターの問題などが検討課題になるものと思われる。

③ 第3グループ。参加組織調査。

第3グループが担当する作業は大別すれば,

- イ) 所蔵館の確認および欧文誌数調査リスト出力
- ロ) 個別版磁気テープの仕様案作成
- ハ) 調査資料の封入, 発送

である。イ)については、この作業にともなってデータシートの枚数, 予備版の必要冊数の把握, 配置コードの確認, 所蔵誌数の点検などの基礎的調査がおこなわれなければならない。

昭和59年度 学部学生別開架図書貸出統計

区 分	文	教 育	法	経 済	理	医	薬	工	農	教 養	医 短	計
59/4	冊 256	冊 60	冊 269	冊 103	冊 473	冊 72	冊 23	冊 387	冊 79	冊 408	冊 7	冊 2,137
5	584	165	580	221	888	94	32	910	141	1,264	24	4,903
6	636	174	578	242	879	72	56	1,032	154	1,258	35	5,116
7	612	153	482	231	748	91	64	975	212	1,037	60	4,665
8	274	49	147	63	255	32	7	320	52	203	30	1,432
9	611	94	493	199	629	92	57	931	271	1,392	63	4,832
10	749	146	596	298	1,060	110	58	1,734	267	1,678	60	6,756
11	809	193	727	229	837	102	30	1,190	181	1,383	67	5,748
12	802	198	690	274	966	111	60	1,139	230	1,672	60	6,202
60/1	988	199	649	420	909	82	36	1,078	209	1,975	49	6,594
2	938	178	970	342	1,151	108	91	2,176	370	2,750	57	9,131
3	528	61	212	119	605	76	61	493	87	1,228	36	3,506
計 (A)	7,787	1,670	6,393	2,741	9,400	1,042	575	12,365	2,253	16,248	548	61,022
構成比 (An/An)	% 12.8	% 2.7	% 10.5	% 4.5	% 15.4	% 1.7	% 0.9	% 20.3	% 3.7	% 26.6	% 0.9	% 100
学生数 (B)	人 546	人 127	人 883	人 442	人 653	人 491	人 166	人 1,985	人 627	人 5,671	人 504	人 12,095
貸出密度 (A/B)	冊/人 14.3	冊/人 13.1	冊/人 7.2	冊/人 6.20	冊/人 14.4	冊/人 2.1	冊/人 3.5	冊/人 6.23	冊/人 3.6	冊/人 2.9	冊/人 1.1	冊/人 5.0

(学生数は昭和59年5月1日現在の学部学生および聴講生である。)